令和４年度　東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程学位論文要旨

接続と孤立のインタラクション

東京藝術大学大学院美術研究科
博士後期課程美術専攻日本画研究領域
学籍番号 1320902
齋藤愛未

論文要旨

私は、周囲との距離を“心地の良い孤立”になるように測っている。自身が核家族であることや、兄弟姉妹がいない環境にあることが、孤立や独立への共感や、そうした距離感のとり方に影響しているのかもしれない。この距離感は自身の絵画制作においても、モチーフの選択基準や作品構成に影響している。

本論文にいう「接続」とは、モチーフとなる対象と社会、モチーフと作者、作品と作者、作品と観者などが、心の働きを伴って互いに繋がることであり、「孤立」とは、対立・対応・連続することがなく、非共感状態である。そして「インタラクション」とは、この接続と孤立が相互に関係し合う状態である。コロナ禍によるオンライン化が、ビデオチャットの活用などによる非対面のコミュニケーションと距離感を生み、接続していても孤立していると同時に、孤立状態からでも容易に接続が可能な状態になっている。

本論文では、作者と作品において「接続」と「孤立」がそれぞれに呼応し合い、自作品の鑑賞が観者の意識に影響を与えることで新たな現実認識へと繋がっていく試みについて論述した。またその方法論として、レイヤー構造と修辞表現を用いていることを述べた。

レイヤー構造とは、画面が階層状態になっており、各層（レイヤー）に込められた様々な要素が積層している状態である。この多重構造が生み出す空間には、多様な解釈から多くの接続が生まれ、シンプルな解釈にならない効果を期待できる。修辞表現とは、言語の世界で発展してきた表現方法で、比喩や擬人法などが含まれる。絵画の世界での比喩や擬人法は、モチーフをあるものに喩えたり見立てたりして、連想を促すことを目的に、豊かで深い表現を生んできた。この修辞表現を使用することで、様々な解釈に基づく接続が生まれ、観者によっては作品の意図にダイレクトに接続するケースも期待できる。

自作品は、このレイヤー構造や修辞表現を併用し複雑にすることで、観者に知覚の「ぶれ」や「ずれ」を伴って解釈の幅が生まれ、観者の内に新たな触発が生まれることを試みている。

本論文は序章、本論（３章）、終章で構成される。各章の概略は以下のとおりである。

第１章「接続と孤立の併存」では、自身の絵画制作の初動段階について解説した。私は日常の中でシンパシーを覚えた事象に、自己の感情をリンクさせて絵画化を図る。自作品に混在する接続や孤立は、共感性や自己隠蔽によって生み出されている。感情移入の要因である共感性やアニミズムは、「接続」と類似する派生的形態である。また一人っ子だった私が、周囲（人に限定されない）との距離感を常に測りながら、自作品でも作意を容易に推し量られないように構成していることを述べた。

第２章「イメージのぶれとずれ」では、自作品が、イメージの可視化と作意の隠蔽を目的として、レイヤー構造で“ぶれ”、修辞表現で“ずれ”を生じさせていることを解説した。一枚の作品に何層ものレイヤー構造を用いた構成には、一層、二層、三層と重ねていくレイヤーの、一つ一つに意味を持たせていること、そして意味を持つそれぞれのレイヤーを重ねることで、観者のイメージにぶれ（解釈の揺れ）を生じさせようとしている。修辞表現では、客観的に存在する対象を喩え（見立て）によって別の対象に置き換えることで、観者の知覚にずれを生じさせようとしている。レイヤー構造及び修辞表現を用いた自作品を例に、観者に生じる様々な知覚について具体的に明示した。

第３章「イメージの喚起と新たな現実認識」では、第１章及び第２章を踏まえ、作品を介して観者の思考空間にアプローチすることを論じた。提出作品「遠神恵賜（とおかみえみため）」の解説として、レイヤー構造、修辞表現を用い、観者の多様な解釈を生む試みについて具体的に示した。メインモチーフの瞽女（ごぜ：盲目の芸能者）について、不条理といった負の観念への共感性や視覚障害者との接続から、このモチーフに着目したこと、また複数のレイヤー構造と修辞表現を併用することで、観者の内に多様な触発を生み、その先の新たな現実認識に繋がることを想定していることを示した。

終章では、本論文のまとめと、今後の課題と展望について述べた。

以上